

令和 8 年度 一般入学試験
適性検査型 入学試験問題

適性検査 I

注意

1. 答えは解答用紙のきめられたところに書きなさい。
解答らんをまちがえると、得点になりません。
2. 解答用紙に受験番号を書きなさい。
3. 検査時間は 4 5 分です。
4. 解答には B 以上の濃いえんぴつを使用してください。
5. 解答がうすいなど見分けられない場合、
採点対象外となる場合があります。

昭和学院中学校

次の**文章1**と**文章2**を読み、あとの問題に答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。（*印のついている言葉には、本文のあとに**【注】**があります。）

文章1

ところが、私たちはいつの頃ころからか、動かずにじっとしていることに価値を置かなくなりました。忙いそがしく動き回る人こそ能力のある人であり、学生たちでさえ、手帳がスケジュールでいっぱいになることこそ自らが有能であることを示す証しとして、価値を置くようになりました。スケジュールに空きがあると、自分は*およお・よ・びびでないのだと思って不安になる。かつてそれを「スケジュール症候群しようつしこうぐん」と名付けた心理学者もいます。

「お忙しいなか」は相手をほめることばとして、挨拶あいさつに多用されていることはあなたもご存じでしょう。私は講演な

どに招かれてそう言われるたびに、自分がするようにしか見えないとしたら、なんと恥はずかしいこと！と思うのですが、挨拶ことばにいちいちたてつくわけにもゆかず、言われるたびにひとり居心地の悪さをかみしめています。本当は「忙しくしているひまはありません」と声に出して言えたらいいのですが、なかなか難しい。でも、この場をお借りして、なんとか思いがお伝えできたら、と願っています。いえ、「お伝えできたら」なんておこがましい。実は私もまた、ほうっておくとたちまち忙しさがもたらす*安逸あんいつに身をゆだねてしまいそうになるからです。らくだから。

（中略）

中学校の先生たちはよく言います。生徒たちをひまにしておいたら、ろくなことはない。だから部活に専念させなくてはと。この種の話を書く度に、私はそう言う先生たちに、子ども時代の、さらには思春期の、誰だれにも踏み込まふれない、ば

うつとする時間はなかったのか、と尋ねたくなります。ひとり居に耐え、あるいは独り居の時間を自らつくり出していくという訓練を自分に課さないまま、大人になってしまったのかと。

退屈を知る人間でありたい、と私は心から願ってきました。退屈こそ精神の自立になくってはならないものと思うからです。さらに自らの精神の自立なくして、他者と本当の意味で

⑦

つながることはできないし、他者の内面を侵さずにいることもできないと考えるからです。それにしても今や退屈を埋めるもの、退屈を奪うものは巷に溢れています。幼い子どもにおもちゃを与えすぎると創造性が育たなくなるとよく言われますが、大人たちもまた次々と生産される“おもちゃ”の洪水の中で、自ら考えることを*放棄し始めているようにも見受けられます。

年中、イベントだらけ。イベントがないと、もたないとい

う人々がいます。中学・高校生を巻き込んだのよさこい祭りのなんというひろがりでしょう。

「もともと年一度のお祭りの踊りだったのに、今は年中お祭りみたい」

高知市内で商店を営んできた友人は、常にハイテンションを要求してくる昨今のこんな空気の中で、人はじっくりものを考えることができるのかしらと、案じています。この騒々しさの中で私たちは次第次第に自ら気付かないまま*粗野になりつつあるのではないかと気になります。みんないっしょに、元氣よく歌い踊ることがなぜ悪い？ すぐにも反論が返ってくるでしょう。でも祭りは、その前提に地味で禁欲的な日常の繰り返しがありました。ところが今は、日常はとるに足りないもの、同じことの繰り返しは停滞と同意語であるかのように語られることが多くなり、こうしたイベントに参加しない若者たちを暗いだ、変だ、覇氣がないだのと、マイ

ナスにしか評価しない空気がどんどん強くなっています。本当にそれで大丈夫でしょうか。

いや、若者たちのこうした取り組みは町おこしにも大いに役立っているのだ、という声があることは知っています。でも、本当にそうでしょうか。私は、こうした昨今のイベントは一種の麻薬まやくのようなものではないか、と考えています。いつとき確かに元気になる。盛り上がる。でも次にはさらなるテンションの高さが求められる。それがなければ、日常は空しく、つまらないものに見えてくる。イベントを知らなかったときより一層。この繰り返しの中で、人はいったいどういう方向に向かうのでしょうか。

(しみずまさこ おとな
清水真砂子『大人になるっておもしろい?』による)

【注】 およびでない —— その場に必要とされていない人。

安逸 —— 向上の目標や、高い人生設計を持たずに毎日を過ごす様子。

放棄 —— 自分が行うべきことを、自分の意志で行

わないこと。

粗野 —— 言動などが、あらあらしいこと。

文章2

たくさんさんの友だちがいるとしても、そのなかに何人か、ほんとうに大好きな人がいることがありますよね。モモの場合もそうでした。すぐく親しい友だちが二人いました。その二人は毎日モモのところに来て、あらゆることをモモと話しました。一人は若くて、もう一人は年をとっていました。どちらが好きかなんて言えないくらい、モモはその二人のどちらとも仲良しでした。

若いほうはきれいな顔立ちで、夢見るような目をしていて、おしゃべりが上手でした。いつも、とつびょうしもないことを言ってはケラケラと笑うので、だれもがいつしよに笑わず

にはいられませんでした。名前はジロラモといいましたが、みんなからはただジジとか、ガイドのジジとよばれていました。お客さんに町をあんないするときには、野球帽やきゅうぼうをかぶり、あれこれ作り話をするのでした。特に、モモが聞いているときには、ジジは次々に話を思いつきました。それらの話は何週間もかけてふくらんでいきましたが、ジジにはまだ、自分が空想した話をどうすればいいのか、わかりませんでした。年をとったほうの友だちは、道路そうじのベツポでした。実際にはちゃんとした名字があるのですが、みんながそう呼ぶので、ベツポも自分のことを道路そうじのベツポと言っていました。

道路そうじのベツポは、頭が少しおかしいと思われていました。何をきかれてもやさしくほほえむだけで、答えなかったからです。ベツポはどんなことでも、じつくりと考えました。答えが必要ないと思ったときには、だまりこくっています。

した。しかし、答えが必要だと思ったときには、その答えについて考えつづけました。何かを答えるまでに、ときには二時間、ときには丸一日かかったのです。

そんなに長く待てるのは、モモだけでした。まちがったことを言わないようにするために、ベツポがそれだけ時間をかけて考えているのだと、モモにはわかっていました。世界中の不幸は、急いだり、いいかげんだったりしたために生まれた、たくさんのウソが原因なんだ、とベツポは思っていたからです。

ガイドのジジと道路そうじのベツポほど世界や人生についての考え方がちがう二人が、友だちどうしでいるなんてありえないように思えます。

でも、二人は友だちだったのです。

ふしぎなことに、青年ジジが軽はずみなことをしても責めたりしないのは、年をとったベツポただ一人でした。同じよう

に、ふうがわりなベツポをあざ笑ったりしないのは、おしゃべりなジジだけだったのです。

それはたぶん、小さいモモが、二人の話にじつくりと耳をかたむけていたためでもあるでしょう。

道路そうじのベツポは毎日、夜が明けるずっと前に、古くてキイキイ音がする自転車で町の中心部に行きました。ベツポはそこで、ほうきと手押し車^{てお}を受け取り、どの通りのそうじをするか割りあてられるまで、仕事仲間といっしょに待っていました。

道路をそうじするとき、ベツポはゆっくりでしたが、休まずに働きました。一歩進むごとに息をすい、息をすうたびに一回、ほうきを動かししました。

一歩進んで……息をすって……ほうきを動かす。一歩進んで……息をすって……ほうきを動かす。

目の前のきたない道路をはいて、きれいにしながら、どん

どん進んでいくうちに、よく大きな考えがうかんでくるのでした。でもそれは言葉にはできない考えで、かすかなにおいや、夢で見た色について伝えるのがむずかしいのと同じくらい、ほかの人に伝えにくいものでした。

仕事のあとでモモのところに行つてすわると、ベツポは自分の大きな考えをせつめいしました。モモがいつもどおりに話を聞いてくれるので、ベツポの舌は軽くなり、正しい言葉が見つかるのでした。

たとえばベツポは、こんな話をしました。「わかるかい、モモ、目の前にとっても長い通りがあるとするよ。これは長すぎる、ぜったいにそうじが終わらない、と人は考えてしまうんだ」

話をつづける前に、ベツポはだまってしばらく前を見つめました。それから、言いました。「終わらないと思って、仕事を急ぎ始める。そして、どんどん急ぐんだ。目を上げるた

びに、自分の前にのびている道路が少しも短くなっていないのを見る。それで、もつともつとがんばる。最後には息が切れてしまつて、もう動けなくなる。でも、通りはあいかわらず目の前にのびている。そんな働き方をしちゃ、いけないだよ」

ベッポはひとときのあいだ考えこみ、それから、また話をつづけました。「一度にその道路全部のことを考えちゃいけないんだ。わかるかい？ ただ、次の一歩、次の息、次にほうきではなくことだけを、考える。それをくりかえすんだ。そうすれば楽しくなってくるし、仕事もうまくいくんだよ」

(ミヒヤエル・エンデ まつながみほ 松永美穂訳『モモ (絵本版)』による)

〔問題1〕

線部⑦とありますが、**文章2**に登場する「モモ」が精神的に自立している子どもであることがわかる部分を**文章2**から十九字でぬき出しなさい。

〔問題2〕

文章2では、「ベッポ」と「世界や人生についての考え方がちがう」人物として「ジジ」がえがかれています。この二人の考え方のちがいを五十字以上、六十字以内で説明しなさい。

〔問題3〕

あなたは最近、日々の過ごし方について考えるようになりました。ある友人は毎日を予定でうめ、趣味や仕事、人づき合いなどに積極的しゆみに時間を使っています。一方で、別の友人は「何もしない時間」や「ぼーっとする余白」を大切に

〔条件〕

しています。あなた自身はどちらの考え方により共感しますか。その理由と、あなたが実際にどのように時間を使いたいと考えているかを、**文章1**または**文章2**をふまえて、四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の〔条件〕と〔きまり〕にしたがうこと。

- ① どちらの立場に共感するかを明確にすること。
- ② その理由を説明する際に、**文章1**または**文章2**の内容をふまえること。
- ③ 自分の時間の使い方を具体的に書くこと。
- ④ 適切に段落分けして書くこと。

「きまり」

- 題名は書きません。
 - 最初の行から書き始めます。
 - 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
 - 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
 - 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じまずに書きます（まずの下に書いてもかまいません）。
 - 。と」が続く場合には、同じまずに書いてもかまいません。この場合、「」で一字と数えます。
 - 段落をかえたときの残りのまずは、字数として数えます。
 - 最後の段落の残りのまずは、字数として数えません。
-